

日本における東アジア海域交流史研究の現状と動向

伊 東 貴 之

1. はじめに

近年、日本の歴史学界においては、従来のように、日本の歴史を列島の中に閉じ込めたかたちで理解する、いわゆる一国史観的な見方への反省やその克服を目指して、また中国や朝鮮・韓国、琉球などについても、近代以降の国民国家を自明なもの見なし、そこから遡ってそれぞれの国や地域の歴史を記述する方法への反措定として、日中間や東アジアの交流史、就中、その境界も曖昧で、不確定な要素を含むと同時に、多元的なネットワークの錯綜した展開の様相を示す、海域交流史の研究が活性化し、多くの成果が生み出されるに至っている。本報告では、そうした研究上の動向や現状について、取り分け人文学の分野における大規模な共同研究のプロジェクトとしても注目された、文部科学省・科学研究費補助金〔特定領域研究〕「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」（通称・にんぷろ、領域代表・小島毅）の成果を中心としつつ、若干の紹介を試みたい。

2. 前史から近年の研究状況へ

本報告では、近年の日本における東アジア海域交流史研究の現状と動向について、主として多分野横断的な共同研究のプロジェクトの試みの一端を紹介させて頂くことに重点を置き、紙幅の関係からも、必ずしも個別研究の網羅的なレビューを目指すことはしない。なお、そうしたより専門的な研究の現況については、それぞれ近年、公刊された、桃木至郎編『海域アジア史研究入門』（2008）や本シンポジウムにも参加されている、榎本渉「日宋交流史研究」（2010）などにおいて、きわめて詳細な動向紹介と批評が展開されているので、詳しくはそちらに譲り、御関心の向きには、適宜、参看を願うことにしたい¹。しかるに、近年の活況に至る、ある程度の前史として、パイオニア的な研究者の代表的な論著に加えて、むしろやや一般向けの啓蒙的な著作、更には、斯界や読書界においても画期的なシリーズや叢書などの一斑を、必要に応じて、まずは瞥見することとしたい（文中・敬称略）。

さて、取り分け近年の東アジア海域交流史研究は、言うまでもなく、日本史（自国史）の相対化に加えて、中国史・朝鮮史といった、やはり国家や王朝を中心とする枠組みにおいて観念されてきた東洋史の諸分野、更には、そうした国家間関係として語られがちで

¹ 桃木至郎編『海域アジア史研究入門』（岩波書店、2008）、榎本渉「日宋交流史研究」（遠藤隆俊他編『日本宋代史研究の現状と課題—1980年代以降を中心に—』汲古書院、2010）、参照。

あった従来の対外交渉史や、内陸ユーラシアに偏重していた東西交流史などに対して、多様な「地域」や「海域」の視点を加味することで、それらを大幅に刷新し、相対化する意図にもとづくものである²。従って、必ずしも近年の諸研究のように、そうした多元的なネットワーク・システムの視点に依拠するものとは限らないが、日中交流史を中心として、広く東アジア海域における対外交渉史や国際関係史の研究には、一面で、むしろ戦前から、それなりの蓄積が存していた。

まず日中交流史の分野においては、戦前からの研究歴がある、パイオニア的な存在として、森克己（1903～1981）がいる。森は、夙に日宋貿易や日宋間の文化交流史の先駆的な研究で知られ、戦前の満洲建国大学や九州帝国大学などを経て、戦後も長らく中央大学などで教鞭を執った。生前にも著作集が編まれたが、現在ではその著作は入手し難い状況にあり、「にんぷろ」の一環として、改めて『新編 森克己著作集』全5巻が刊行中である³。他にも、この分野では、やはり戦前から活動していた研究者として、明末清初期の鄭成功や朱舜水らの研究で知られる、石原道博（1910～2010）らを挙げることが出来る⁴。

次いで、戦後、夙い時期から、一貫して中世東アジアを舞台に、中国・朝鮮などとの対外交渉史、国際関係史の研究を精力的に推進した代表的な存在として、田中健夫（1923～2009）の名を逸することは出来ない。田中は、長く東京大学史料編纂所に勤務し、『中世海外交渉史の研究』（1959）、『中世対外関係史』（1975）など、質量ともに充実した、夥しい数の著作を残した⁵。

また、やはり戦前期から、台北帝国大学などを拠点として、朱印船貿易などを扱う、いわゆる南洋史・南島史の分野が開拓された。この分野でのパイオニアとしては、岩生成一（1900～1988）らが挙げられる。彼は、戦前期に主著『南洋日本町の研究』（1940）で、帝国学士院賞を受賞、戦後は更に、近世対外交渉史や日蘭交渉史の分野を先導した。しかるに、一面で、彼の見解は、一般読書界でも影響力のあった、和辻哲郎（1889～1960）の『鎖国—日本の悲劇』（1950）などととともに、いわゆる「鎖国」論を完成させた側面もあり、

² そうした姿勢を明確に表明したものとして、例えば、桃木至郎・山内晋次・藤田加代子・蓮田隆志「海域アジア史のポテンシャル」、前掲『海域アジア史研究入門』の総説、参照。

³ 伊原弘他編『新編 森克己著作集』全5巻（勉誠出版）。現時点で、既に上梓されているのは、第1巻『新訂 日宋貿易の研究』（2008）、第2巻『日宋貿易の研究・続』（2009）、第3巻『日宋貿易の研究・続々』（2009）、第4巻『日宋文化交流の諸問題』（2011）である。

⁴ 石原道博『鄭成功』（三省堂・東洋文化叢刊、1942）、同『明末清初日本乞師の研究』（富山房、1945）、同『国姓爺』（吉川弘文館・人物叢書、1959）、同『朱舜水』（吉川弘文館・人物叢書、1961）など、参看。他にも、戦前からの対外関係史研究の成果としては、古代から江戸時代までの日中関係史を概説した、木宮泰彦『日華文化交流史』（富山房、1955）などが挙げられる。

⁵ 田中健夫『中世海外交渉史の研究』（東京大学出版会、1959）、同『中世対外関係史』（東京大学出版会、1975）、同『日本前近代の国家と対外関係』（吉川弘文館、1987）、同『前近代の日本と東アジア』（吉川弘文館、1995）、同『前近代の国際交流と外交文書』（吉川弘文館、1996）、同『東アジア通交圏と国際認識』（吉川弘文館、1997）、同『対外関係史研究の歩み』（吉川弘文館、2003）など、参看。他にも、田中とはほぼ同世代の研究者では、『蒙古襲来研究史論』（雄山閣、1977）、『対外関係の史的展開』（文献出版、1996）などを著した、川添昭二などが、当初からの専門であった、中世の九州史を立脚点としつつ、日中間の交流史へと研究を展開させた異色の存在としても、注目される。

後述するように、こうした見方に対しても、近年、大幅な留保や疑問が提起され、修正が加えられるに至っている⁶。同様に、戦後は、京都大学で教鞭を執り、金銀貿易などの貨幣史・鉱山史・貿易史の研究でも知られる、小葉田淳（1905～2001）も戦前、やはり台北帝大に赴任し、『中世南島通交貿易史の研究』（1939）などの著作を著している⁷。なお、これらの論著は、広く南アジアにも及ぶ対外交渉史・海域史の先駆的研究と言えるが、二人とも、元来は、日本史分野の研究者であったこと、また時代的にも、植民地経営なども符節を合していた部分も多く、戦後は、動もすれば長く等閑視される傾きも否めなかった。

上述した諸研究は、何れも中世から近世初頭にかけての時期を扱うものであるが、一国史観的な枠組みが鞏固であった当時においては、やや周縁的な研究と見なされていたことは、否定し得ない。翻って古代史の分野にあっては、大陸との関連の深さも、無論、それ以降の時代の比ではなく、また少なくとも、戦後歴史学においては、戦前の皇国史観への批判やその克服といった意図も含め、当初から、東アジア規模の枠組みの中で、日本の国家形成を考えることは、むしろ自明の前提であったとも言えよう。

報告者は、日本古代史は勿論、日本史プロパーに関しては、むしろ門外漢でもあるので、伝統的な中国史・東洋史の側からの戦後の対応や反応の一端について、些かの紹介を兼ねて、若干の再考を試みたい。まず、中国古代史の分野で、西嶋定生（1919～1998）が、有名な中華帝国による「冊封体制」論を提唱した際などにも、戦前の歴史学の克服という意図とともに、当然、一国史観的な枠組みへの反措定という含意が籠められていたものと思われる。しかるに、国家や王朝間の政治的関係を中心に考察される西嶋の所説の場合もまた、現在から振り返るなら、やはり「国家」的な枠組みを過大視し、それに偏重している側面は、否定出来ない⁸。こうした見方に対して、近年、いわゆる「東アジア文化圏」といった枠組みをリジッドな前提として、自明視することへの一定の疑問が附されている所以でもあろう⁹。因みに、西嶋はまた、邪馬台国・北九州説に与したことで知られている。翻って、時代区分論争などでは、西嶋と対立した、宮崎市定（1901～1995）にも、大和朝廷の草創期に関する意欲的な論著が存していることも、興味深い点である¹⁰。その他、元来は、

⁶ 岩生成一『南洋日本町の研究』（南亜文化研究所、1940；岩波書店、1966）、同『朱印船貿易史の研究』（弘文堂、1958；同・新版、吉川弘文館、1985）、同『鎖国』（日本の歴史14・中央公論社、1966；中公文庫版、1974）、同『続 南洋日本町の研究』（岩波書店、1987）、また、和辻哲郎『鎖国—日本の悲劇』（筑摩書房、1950；のち岩波文庫版・全2冊、1982）など、参看。

⁷ 小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』（日本評論社、1939；増補版、臨川書店、1993）、同『中世日支通交貿易史の研究』（刀江書院、1941）など、参看。

⁸ 西嶋定生『中国古代帝国の形成と構造—二十等爵の研究』（東京大学出版会、1961）、同『中国古代国家と東アジア世界』（東京大学出版会、1983）、同『日本歴史の国際環境』（東京大学出版会・UP選書、1985）、同『邪馬台国と倭国—古代日本と東アジア』（吉川弘文館、1994）、同『倭国の出現』（東京大学出版会、1999）、同『古代東アジア世界と日本』（岩波現代文庫、2000）、『西嶋定生東アジア史論集』全5巻（岩波書店、2002）など、参看。

⁹ 澤井啓一『〈記号〉としての儒学』（光芒社、2000）、李成市『東アジア文化圏の形成』（世界史リブレット・山川出版社、2000）など、それぞれ参照。

¹⁰ 宮崎市定『謎の七支刀—五世紀の東アジアと日本』（中公新書、1983；中公文庫、1992）、同『古代大和朝廷』（筑摩書房・筑摩叢書、1988；ちくま学芸文庫、1995）など、参看。

唐宋時代の経済史・商業史を主要な研究領域としていた、日野開三郎（1908～1989）なども、夙に中国史の側からの東アジア国際関係史・交流史のパイオニアの一人と言えよう¹¹。

また、現在、日本史の分野から、むしろ東アジア的な視点に立った日本の古代文化の研究において、多くの画期的な問題提起を行っている論者として、上田正昭や東野治之らを挙げることが出来よう。その他、西安で墓誌が発見された、奈良時代の留学生・井真成をめぐっては、中日両国の研究者による共同研究がなされていることも、特筆に値しよう¹²。

次いで、前出の田中健夫らの研究を継承しつつ、取り分け近年、日本中世史の分野から出発して、中国・朝鮮・日本といった国家の枠組みを超えた、斬新な視点から、対外交渉史や東アジア海域史の研究に鋭意、取り組み、多くの著作を上梓している論者に、村井章介がいる。村井の研究は、具体的には、商人、禅僧、海賊（倭寇）など、さまざまな人間集団の行動や、それが展開される場としての船や航路、港町などから、典籍や各種の文化遺産まで、きわめて多岐に亘っている¹³。逆に、この時期の同様なテーマに関する、中国史の側からの越境的な研究に、佐久間重男の『日明関係史の研究』（1992）などの業績を挙げることが出来る¹⁴。

続いて、近世の日中交流史を中心とする対外交渉史の分野に目を転ずるなら、江戸時代における漢籍輸入と受容の実態を悉皆調査した、大庭脩（1927～2002）の卓抜した業績を逸することは出来ない。大庭は、むしろ中国古代史や中国法制史、木簡学などから出発して、きわめて多分野に亘る独創的な研究でも知られており、長く教鞭を執った関西大学を、この分野の拠点のひとつに育て上げることに尽力した。『江戸時代における唐船持渡書の研究』（1967）並びに、同書を増補した、『江戸時代における中国文化受容の研究』（1984）によって、日本学士院賞を受賞、更に時代を遡って、『古代中世における日中関係史の研究』（1996）も著している¹⁵。

¹¹ 日野開三郎『日野開三郎東洋史学論集』第9巻・第10巻（『北東アジア国際交流史の研究』上・下、三一書房、1984）、参看。

¹² 『上田正昭著作集』全8巻（角川書店、1998～1999）、東野治之『日本古代木簡の研究』（塙書房、1983）、同『木簡が語る日本の古代』（岩波新書、1983）、同『遣唐使と正倉院』（岩波書店、1992）、同『日本古代金石文の研究』（岩波書店、2004）、同『遣唐使』（岩波新書、2007）、同『鑑真』（岩波新書、2009）、専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本—新発見「井真成墓誌」から何がわかるか』（朝日選書、2005）など、参看。

¹³ 村井章介『アジアのなかの中世日本』（校倉書房、1988）、同『中世倭人伝』（岩波新書、1993）、同『東アジア往還—漢詩と外交』（朝日新聞社、1995）、同『海から見た戦国日本—列島史から世界史へ』（ちくま新書、1997）、同『国境を超えて—東アジア海域世界の中世』（校倉書房、1997）、同『東アジアのなかの日本文化』（放送大学教育振興会、2005）、『境界をまたぐ人びと』（山川出版社、2006）など、それぞれ参看。

¹⁴ 佐久間重男『日明関係史の研究』（吉川弘文館、1992）、参看。

¹⁵ 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、1967）、同『江戸時代の日中秘話』（東方書店、1980；同・増補版『日中交流史話』燃焼社、2003）、同『江戸時代における中国文化受容の研究』（同朋舎出版、1984）、同『古代中世における日中関係史の研究』（同朋舎出版、1996）、同『漢籍輸入の文化史』（研文出版、1997）、同『徳川吉宗と康熙帝—鎖国下での日中交流』（あじあブックス・大修館書店、1999）など、参看。

近世通交貿易史の領域ではまた、平戸のオランダ商館の記録などにもとづいた日蘭交渉史の研究が伝統的に存在している。この分野では、『日蘭交渉史の研究』（1986）の金井圓（1927～2001）、『近世初期の外交』（1990）の永積洋子らが知られている¹⁶。また、関連する分野として、時代的には少しく遡り、近世初期葉のスペイン・ポルトガルなどの日欧交渉史やキリシタン史に新生面を切り開いた、高瀬弘一郎の一連の研究も、注目される¹⁷。

さて、日本では、1630年代に、いわゆる「鎖国」体制が整えられていったとされるが、この点に関しても、近年の研究では、むしろこの語の安直な使用に疑義を呈して、相対化を試みようとする傾向が顕著である。すなわち、当時の外交の在り方を「日本型華夷秩序」と名づけて、いち早く再検討を加えた、荒野泰典を筆頭に、朝尾直弘、加藤榮一、ロナルド・トビ、山口啓二、山本博文、紙屋敦之、池内敏ら、論者によって若干のニュアンスの相違はあるものの、明清時代の「海禁」政策との類比などをもとに、徳川政権は完全に国を閉ざした訳ではなく、むしろ独自の外交儀礼や「武威」を通じて、日本を中心とした意識的な外交関係の構築を試みたものとする考え方が主流化しつつある。こうした傾向もまた、東アジア規模での対外関係史研究の深化を背景にしつつ、やはり一国史観的な枠組の止揚を図る潮流に棹さすものと言えよう。朝貢による冊封関係にもとづいて自己の正当性を支える、伝統的な華夷秩序からの離脱の方向性は、「国王」に代わる「日本国大君」という将軍の外交上の称号にも看取され、異国の入びとの行列や将軍による謁見の儀式は、その「威光」を象徴的に表現するに相応しいものと受け止められた¹⁸。

更には、中国史・東洋史の分野からは、近年、川勝守が、古代日本と東アジア世界、近世日本の対外関係史の双方の領域で、問題提起的な著作を公刊し、近世の日中交流史・文化交渉史の分野では、前出の大庭脩の学統を継ぐ、松浦章が、やはり近年、多くの著作を

¹⁶ 金井圓『日蘭交渉史の研究』（思文閣出版、1986）、永積洋子『近世初期の外交』（創文社、1990）など、参看。

¹⁷ 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』（岩波書店、1977）、同『キリシタンの世紀—ザビエル渡日から「鎖国」まで』（岩波書店、1993）、同『キリシタン時代対外関係の研究』（岩波書店、1994）、同『キリシタン時代の文化と諸相』（八木書店、2001）、同『キリシタン時代の貿易と外交』（八木書店、2002）など、参看。

¹⁸ 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、1988）、更には、朝尾直弘『鎖国』（日本の歴史17・小学館、1975）、同『朝尾直弘著作集・第五卷—鎖国』（岩波書店、2004）、加藤榮一『幕藩制国家の形成と外国貿易』（校倉書房、1993）、同『幕藩制国家の成立と対外関係』（思文閣出版、1998）、ロナルド・トビ『速水融・永積洋子・川勝平太訳』『近世日本の国家形成と外交』（創文社、1990）、同『「鎖国」という外交』（日本の歴史9・小学館、2008）、山口啓二『鎖国と開国』（岩波書店、1993；岩波現代文庫、2006）、山本博文『鎖国と海禁の時代』（校倉書房、1995）、紙屋敦之『大君外交と東アジア』（吉川弘文館、1997）、池内敏『大君外交と「武威」—近世日本の国際秩序と朝鮮観』（名古屋大学出版会、2006）などを、それぞれ参看されたい。翻って、ロシアの南下政策に伴う、ロシア船の蝦夷地などへの漂着、来航といった状況下で、むしろ徳川政権の後期において定着した、いわゆる「鎖国祖法観」の成立・生成について、藤田覚『近世後期政治史と対外関係』（東京大学出版会、2005）に指摘がある。詳細は、特にその第Ⅰ部・第二章「対外関係の伝統化と鎖国祖法観の確立」、参照。

陸続と世に問うている¹⁹。また、日中間の文化交流については、得に文学の分野で、徳田武らの業績が注目され、日朝間の通交・貿易に関しては、田代和生、朝鮮通信使をめぐるでは、李元植、仲尾宏らの研究が著名である²⁰。更に、朝鮮から中国（清）に入貢した燕行使に関しては、近年、夫馬進による研究があり、彼を中心とする京都大学のCOEプログラムの研究報告書として、浩瀚な『中国東アジア外交交流史の研究』（2007）も公刊されたが、通時的にも、地域的にも、きわめて広い目配りがなされていることが特筆される。更には、朝鮮通信使や燕行使をめぐる、先年、国際日本文化研究センターにおいても、国際シンポジウムが開催され、先般、その成果が上梓されたところである²¹。

また、詳細は、やはり前出の桃木至郎編『海域アジア史研究入門』所収のより専門的な文献案内に委ねたいが、最近では、長崎を窓口とする外交・貿易に加えて、併せて「四つの口」などとも称される、対馬－朝鮮、松前－アイヌ（蝦夷地）、薩摩－琉球における関係をめぐる、より地方的な研究のほか、日本海を朝鮮半島、日本列島、沿海州、サハリンなどに囲まれた内海として捉える、環日本海地域の交流史などの研究も、大いに進捗の度を深めている²²。

その他、一般読書界にも好評理に迎えられた、近年の着目すべき叢書やシリーズとして、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史』全6巻（1992～1993）、池田温・王晓秋・王勇・大庭脩・巖紹壘・周一良・中西進・源了圓・宮田登・楊曾文・吉田忠ほか編『日中文化交流史叢書』全10巻（1995～1998）、小林昌二監修『日本海域歴史大系』全5巻（2005～2006）、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係』全7巻（2010～刊行中）をそれぞれ挙げておきたい²³。

¹⁹ 川勝守『日本近世と東アジア』（吉川弘文館、2000）、同『聖徳太子と東アジア世界』（吉川弘文館、2002）、松浦章『清代海外貿易史の研究』（朋友書店、2002）、同『清代中国琉球貿易史の研究』（榕樹書林、2003）、同『江戸時代唐船による日中文化交流』（思文閣出版、2007）、同『海外情報からみる東アジア－唐船風説書の世界』（清文堂出版、2009）、同『明清時代東亜海域の文化交流』（鄭潔西等訳）（江蘇人民出版社、2009）、同『近世東アジア海域の文化交渉』（思文閣出版、2010）など、参看。

²⁰ 徳田武『近世日中文化交流史の研究』（研文出版、2004）、同『近世近代小説と中国白話文学』（汲古書院、2004）、更には、田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』（創文社、1981）、同『倭館－鎖国時代の日本人町』（文春新書、2002）、同『日朝交易と対馬藩』（創文社、2007）、李元植『朝鮮通信使の研究』（思文閣出版、1997）、仲尾宏『朝鮮通信使と徳川幕府』（明石書店、1997）、仲尾宏『朝鮮通信使－江戸日本の誠信外交』（岩波新書、2007）など、参看。

²¹ 夫馬進〔鄭台燮訳〕『燕行使と通信使』（韓国・新書院、2008）、更には、夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』（京都大学学術出版会、2007）、劉建輝編『前近代における東アジア三国の文化交流と表象－朝鮮通信使と燕行使を中心に－』（国際シンポジウム29・2006）（国際日本文化研究センター、2011）、参看。

²² 前掲、桃木至郎編『海域アジア史研究入門』のほか、古厩忠夫『裏日本』（岩波新書、1997）、関周一『中世日朝海域史の研究』（吉川弘文館、2002）、加藤雄三他編『東アジア内海世界の交流史』（人文書院、2008）など、参看。その他、興味深い視点を示唆したエッセーとして、松方冬子「『四つの口』の彼方－日本近世対外関係史研究の視野」（『U P』421号、東京大学出版会、2007年11月号）、参照。

²³ 荒野泰典他編『アジアのなかの日本史』全6巻（東京大学出版会、1992～1993）、池田温他編『日

最後に、主として、より若い世代の研究者による、近年の研究動向を紹介して、本節の締め括りとしたい。まず、直接的には、狭義の東アジアの交流史を扱ったものではないが、近年、取り分け古代・中世の仏教史の分野で、東アジア規模での接触や交流を踏まえた研究が、俄然、注目されるようになった。上川通夫『日本中世仏教形成史論』(2007)、横内裕人『日本中世の仏教と東アジア』(2008)、河上麻由子『古代東アジア世界の対外交渉と仏教』(2011)などが、その代表例である。また、中世日本においては、禅僧がいわば外交使節や外交官の役割を担った側面が大きいが、伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』(2002)は、そうした意味で、外交史や対外交渉史と仏教史とを架橋する試みとも言える。近年における日中交流史や東アジア海域史研究の大きな成果と言える、榎本渉『東アジア海域と日中交流一九～十四世紀一』(2007)、『僧侶と海商たちの東シナ海』(2010)なども、商人とともに、禅僧たちの人的交流をきわめて重視するものである。更には、環日本海域史や日朝交流史の分野で、関周一『中世日朝海域史の研究』(2002)、近世の日蘭交渉史などに関して、松方冬子『オランダ風説書と近世日本』(2007)などが、それぞれ注目に値する²⁴。

3. 近年における共同研究プロジェクトや学会動向について

さて、こうした東アジア規模での海域交流史の研究は、必然的に、日本史と中国史・朝鮮史などの共同・協働による作業を要請すると同時に、たんに外交史や対外交渉史、経済史などのみならず、思想・宗教・文芸・芸術・科学技術などをはじめとする、文化の諸ジャンルにおける接触や伝播、その受容や変容、文化複合といった、学際的・超域的な内容へと収斂していくことは、むしろ見易い道理であろう。その結果、近年の日本での研究動向の一つの大きな潮流や特徴として、人文学の分野における大規模な共同研究のプロジェクトとしても特筆される、文部科学省の科学研究費による大型プロジェクトの盛況に加え、新たな関連学会の創設などが、大いに注目されるところである。何れも、報告者自身も、直接・間接に関わったものでもあり、その点では、些か烏滸がましい限りではあるが、以下、そうした試みのうち、主要なものを紹介させて頂くことにしたい。

まず最初に、そうした試みの代表的な事例として、平成17(2005)年度～21(2009)年

中文化交流史叢書』全10巻(大修館書店、1995～1998)、小林昌二監修『日本海域歴史大系』全5巻(清文堂、2005～2006)、荒野泰典他編『日本の対外関係』全7巻(吉川弘文館、2010～刊行中)、参看。

²⁴ 上川通夫『日本中世仏教形成史論』(校倉書房、2007)、同『日本中世仏教と東アジア世界』(塙書房、2012)、横内裕人『日本中世の仏教と東アジア』(塙書房、2008)、河上麻由子『古代アジア世界の対外交渉と仏教』(山川出版社、2011)、伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』(吉川弘文館、2002)、榎本渉『東アジア海域と日中交流一九～十四世紀一』(吉川弘文館、2007)、同『僧侶と海商たちの東シナ海』(講談社選書メチエ、2010)、前掲・関周一『中世日朝海域史の研究』(吉川弘文館、2002)、松方冬子『オランダ風説書と近世日本』(東京大学出版会、2007)、同『オランダ風説書―「鎖国」日本に語られた「世界」』(中公新書、2010)など、参看。その他、秀逸な研究史のレビューとして、伊藤幸司「外交と禅僧―東アジア交易圏における禅僧の役割」(『中国―社会と文化』第24号、中国社会文化学会、2009)、手島崇裕「平安時代の対外関係史と仏教―入唐僧・入宋僧研究から見た現状と課題」(『中国―社会と文化』第25号、中国社会文化学会、2010)をそれぞれ参照されたい。

度に実施された、前出の通称「にんぷろ」を挙げておきたい²⁵。本研究では、研究班や研究期間の全体を通じて、寧波それ自体を対象にしたり、浙江地域の特性を分析・考察する個別研究に加えて、東アジア海域全体の交流史や文化接触などの諸問題を扱いつつ、それらが日本の伝統文化の形成に対して、通時的にも、如何に関わり、甚大な影響を及ぼしてきたかを、共同研究の身上とも言うべき、学際的アプローチによって、総合的・包括的に解明することを一貫して試みてきた。

詳細に関しては、当該研究のHPなどを参看されたいが、そこにおいても、まず「研究の概要及び領域の特性」として、概ね以下のようなことが宣言されている。すなわち、「本領域研究は、東アジア海域における人的・物的交流の歴史を多分野横断的に分析し、日本の伝統文化形成過程を再検討することを目的とする。具体的には、中国大陆において東シナ海に面する中核的港湾都市として栄えた寧波を焦点に、歴史的存在として不断に変化する大陸文化がそれぞれの時点においてどのように日本に伝来し、どう影響を与え、どう変容してきたかという問題を検討する。如上の目的達成のため、40歳代の中堅を核にして、歴史学・思想史・文学史・美術史・芸能史・仏教学・考古学・人類学・建築学・船舶工学・数学等の諸分野、総勢137人のメンバーにより、学際的総合研究を遂行して東アジア海域圏内に位置する日本文化の歴史的起源を再構成することをめざす」とある。また、この研究の学問的・社会的な意義としては、「わが国における中国文化研究は世界的に最高水準にある。本領域研究ではその遺産を継承しつつ、特定領域ならではの特性を活かした多分野の学際的共同作業によって、従来とはまた異なる発想・手法による成果を挙げ、斯界の研究水準をさらに一層高めていける。これは日本の人文学の国際的貢献であり、責務でもある」、「上述のように、本領域研究は日本文化の形成過程を東アジアの枠組みから総合的に再考することを意図しており、日本に関する諸分野の研究に与える波及効果はきわめて大きい。過去数百年来の国学的発想を覆す可能性を秘めた画期的な試みである」などと記述されている。

因みに、何故、寧波に着目したかについては、本シンポジウムに参加されている方々に、改めて申し上げるのは、釈迦に説法というものであろうが、この浙江省の寧波（より古くは、明州、慶元などと呼ばれ、14世紀にこの名称になったとされる）こそは、曾ての東アジア海域交流の要の役割を果たした港湾都市であり、いわばハブ港とも言うべき、人と物資、文化や情報の往来と交流の集積地点であり、結節点であった。日本船は、まず彼の地に入港し、後に杭州などから大運河を遡航して、目的地に至った。最澄・栄西・道元・雪舟ら、著名な留学生たちも寧波から上陸している。16世紀には、それぞれ遣明使の船団を擁した、細川氏と大内氏の両大名が、貿易の利権をめぐる、この地で抗争に及ぶという事件も惹起された。倭寇の根拠地もまた、寧波の沖合にあった。余りにも誇大妄想的な内容ではあるが、豊臣秀吉は、大陸侵略を成し遂げた暁には、自身、日本からこの地に移り住んで、東アジア全域に号令する構想すら語っている。従って、寧波は、往事の日本人にとって、一面で、むしろ馴染みの深い都市でもあった。

また、当該研究において提起された、所期の目的や積極的に活用された方法論として、より具体的には、概ね以下の3点に集約することが可能であろう。

²⁵ なお、詳細については、同・プロジェクトのHPを閲覧されたい。<http://www1.u-tokyo.ac.jp/maritime/>。

まず第一には、寧波が占める重要性や特殊性に鑑みて、現在のアカデミズムの学術編制の枠組みを再考に附し、一定程度、それらを打破しつつ、従来、個別の分野で認識されてきた、仏教・書画・演劇・造船・建築・書誌・茶文化・官僚制・農業技術など、多様なジャンルについての学際的・総合的な研究が企図され、諸学の積極的な協働と融合が図られた。すなわち、具体的には、人文諸学を中心としつつも、社会科学や自然科学までを含む、あらゆるディシプリンの研究者が参集したことが特筆されよう。その上で、異分野の研究者同士の共同研究を促進し、日本の学術界全体の遺産を全面的に継承しつつ、今後の学術研究の進むべき道筋を提示することも目標とされた。

次いで、「海域」なり「地域」といった諸点に関しては、大著『地中海』を著したフランスの歴史学者・ブローデル（Fernand Paul Braudel, 1902～1985）の構想なども参照しながら、彼の研究が、経済や社会の分析に些か偏重していたのに対して、人びとの心性や政治的諸関係などをも重視する一方で、ブローデルによれば、中核地域と半辺境の地域との交替の歴史であった地中海とは異なり、中国が一貫して、中核の役割を担って維持されてきたという、東アジア海域の特殊性などに鑑みつつ、当該海域から発信する、一種の世界システム論の構築も意図された。

その際、従来のように国家単位や国家間関係の次元からではなく、実質的な交流の単位としても、よりミクロな地域に視点を据えて、分析や考察を重ねたことも、本研究の斬新な点として、特筆することが出来よう。前述したように、旧来型の東アジア交流史では、「冊封体制」論のように、動もすれば「中華帝国」とその周辺諸国といった国家間の枠組みに焦点を当て、観念される傾向が顕著であった。近年、そうした考え方に対して、具体的な研究成果を踏まえた、再考や見直しが進み、むしろ「国家」ではなく「地域」に着目して、交流の諸相を検証しようとの気運が高まっているが、本研究もまた、かかる動向や潮流に棹さすものである。更に、海域交流を主たるテーマとする所以として、海を地域間の障壁や国境と見なすのではなく、それらを媒介し、多くの地域を繋ぎ、相互に結びつける役割に注目したことは、言うまでもない。

最後に、第三の論点として、東アジアの海域交流史の研究と併せて、またそれと並ぶ大きな柱としても、日本の伝統文化の探求とその再考や再検討が、特筆大書され、提唱されている。すなわち、近年、日本では、教育界を中心に、一般社会から、日本の伝統文化について再認識することの必要性が高唱され、要請されてもいるが、その多くは、旧来からの一国史観的な見方に止まっており、剩え国学的な発想やナショナリズム的な視点から発するものも少なからず存在する。しかるに、歴史学界の最先端においては、そうした見解には、大幅な修正が加えられ、東アジアという広域的な場の拡がりを視野に入れた研究が、むしろ主流化しつつあるのが、現状である。本研究もまた、そうした趨勢に棹さして、いわゆる伝統的な日本文化と観念されてきた諸事象の起源を探求し、その受容や形成の過程を追跡することを通じて、学術的にも厳密で正確な日本史像を再提示することを企図したが、こうした試みは同時に、今日、社会的にも喫緊の課題と考えられる。

それは第一義的には、元来、一方で地域としての多様性を有していた列島が、国家の単位としての「日本」という枠組みに統合され、表象されるに至る経緯において、捨象された地方文化をも視野に収めつつ、「日本」という単位を自明で固有なものと思なすのではなく、各地域で歴史的に形成された所産として理解し、捉え直す視点を実証的にも確立す

ることで、今後の日本文化のあるべき在り方に対しても、一定程度の展望を提示し得ることを目標としている。

また第二に、当該研究は、あくまでも実証的な歴史研究であり、必ずしも政治的・時事的な課題に対して、直接的には回答することを意図していないが、中国文明が東アジア地域で古来、果たしてきた甚大な役割について、多角的に分析しつつ、相互的な交流や影響関係をも視野に入れた研究を行うことは、東アジア全域が、より広汎なグローバリズムの波に浸潤されつつある現在、間接的なながらも、いわゆる歴史認識問題をはじめ、東アジアの相互理解や将来に亘る連帯のためにも、現代的・社会的な貢献の一端を果たすものと思われる。

なお、本研究を通じて、日本のいわば地政学的とも言える優位性の活用もまた、同時に提言されていることも、注目される。実際、寧波から伝来した書画・書籍・道具類などの文物を例に挙げるなら、中国国内では、戦乱などで失われたものも多く、逆に日本国内の寺院や大名家などで、現在に至るまで、大切に保管されて伝わっている事例に事欠かない。こうした地の利を活かした研究拠点を形成し、現物の実地調査を併用した分析作業を行うことで、学術的な国際貢献を果たすことも目指された。

最終的には、この「にんぷろ」の成果の如何についての評価は、むしろ部外者の専門家や後世に委ねるべきものであろうが、現在、領域代表の小島毅・東京大学大学院准教授を監修者として、全20巻の予定で、『東アジア海域叢書』が、汲古書院から刊行中であることを附言しておきたい²⁶。

続いて、同じく平成19（2007）年度～平成22（2010）年度の文部科学省・科学研究費のプロジェクトである「東アジア古典学としての上代文学」（代表者・神野志隆光）についても、少しく紹介を試みたい²⁷。

前述の「にんぷろ」が、歴史的な研究とともに、フィールドワークなどの実地調査を大

²⁶ 現時点では、そのうち、第1巻『近世の海域世界と地方統治』（山本英史編）、第2巻『海域交流と政治権力の対応』（井上徹編）、第3巻『小説・芸能から見た海域交流』（勝山稔編）、第4巻『海域世界の環境と文化』（吉尾寛編）、第5巻『江戸儒学の中庸注釈と海域世界』（市来津由彦編）の5冊が、それぞれ公刊されている。その他、同プログラムの領域代表でもある、小島毅は、元来は、宋学を中心とする中国儒教史の専門家であったが、やはり近年、『東アジアの儒教と礼』（山川出版社・世界史リブレット、2004）に見られるような、東アジアの王権理論の比較研究に加えて、『義経の東アジア』（勉誠出版、2005）や『海からみた歴史と伝説―遣唐使・倭寇・儒教』（勉誠出版、2006）といった、むしろ一般向けの啓蒙書などを通じて、東アジアの海域交流やその歴史的研究の重要性に対して、広く注意を喚起している。他にも、東アジア規模での交易ネットワークや交流に着目した、近年の研究成果としては、金や唐物など、貿易上の独占的権益を確保するシステムを確立しつつ、「神国」の「万世一系」の王を自認する古代的王権の内実を描いた、保立道久『黄金国家―東アジアと平安日本』（青木書店、2004）、東アジア世界の文学という観点から『源氏物語』を位置づけ直し、当時の交易事情や唐物をめぐる叙述に注目して、新たな研究上の視角を提示した、河添房江『源氏物語時空論』（東京大学出版会、2005）なども、それぞれ卓抜な視座を提供するものとして、見逃すことは出来ない。

²⁷ 同・プロジェクトのHPは下記の如くである。<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/eastasia/j/index.html>。また、同・プロジェクトの終了後、『東アジア古典学のために 2007-2010』（科研「東アジア古典学としての上代文学の構築」報告書、2011）が公刊されている。

きな柱としていたのに対して、当該研究は、むしろ文献研究が主体となる性格のものであるが、その理念において、「にんぷろ」とも共通する認識や考え方を少なからず見出すことが出来る。すなわち、研究全体の意図や目的として、「日本における上代文学を文字やテキストのレベルから再検討し、東アジアという、より大きな歴史・文化の中に位置づけると同時に「東アジア古典学」というパラダイムの確立を目指す」との言明がなされている。

ここにおいても、むしろ一つの文化世界としてあった古代東アジア世界が前提視され、列島に閉じられた「国文学」的な発想や「民族文化的・国民文化的に各国の古典（日本の古代文学、あるいは中国、朝鮮の古代文学）」を捉えるパラダイムは斥けられる。無論、それは、「中国地域で先進的に形成されていた文化を中心とするが、それを延伸して、共通の文字（漢字）、共通の文章語（漢文）により、教養の基盤と価値観とを共有する文化世界として、東アジア世界が成り立っていた」ことの再確認を媒介としつつ、現在、「東アジア全体を漢字文化世界としてとらえ、古代文学研究を再定位することが、日本上代文学研究（さらには、中国古代文学研究、朝鮮古代文学研究）の発展形として」、強く要請されており、「東アジア古典学としての上代文学」とは、そうした問題提起でもあると結論づけられている。また、本研究においても、そうした当初からの問題意識や問題設定の当然の反映として、中国古典学研究者や海外の東アジア文学研究者をも交えた、広汎な専門研究者の連携にもとづいて、共同研究を組織化することで、多様な角度からの分析や考察が重ねられ、それらを通じて、「東アジア古典学としての日本文学研究」という新たな在り方を国際的にも発信し、東アジアのみならず、欧米の日本研究が、シノロジーの周縁としてのそれであったり、中国や朝鮮・韓国などと並ぶ個別の地域研究としての日本研究であったりする現況に対して、疑問を提起しつつ、再考を促す機縁となることが目標とされた。

最後に、これまでの中国学や東洋学に関する伝統、東アジアをベースにした文化交流研究などに対する、関西大学のさまざまな取り組みが評価され、2007（平成19）年度に、「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」プロジェクトが、文部科学省の人文科学分野でのグローバルCOEに採択されたが、それにもとづいて発足した、「文化交渉学教育研究拠点」（Institute for Cultural Interaction Studies、略称ICIS）などを基盤に、此度、2009年に新たに創設された「東アジア文化交渉学会」（Society for Cultural Interaction in East Asia）（初代会長・陶徳民）についても、少しく瞥見しておきたい²⁸。

²⁸ 同学会の活動の詳細については、やはりHPを参看されたい。<http://www.sciea.org/japan/index.html>。
なお、同学会では、関西大学の「文化交渉学教育研究拠点」リーダーでもあった、陶徳民が初代会長に就任し、2009年に創立大会が催された。現在、台湾大学の黄俊傑が、第2代会長に就任している。また、関西大学アジア文化交流センター（CSAC）においても、日中文化交流を基軸としつつ、より広く東アジア規模で、多様な文化要素の接触と交流、伝播と影響、受容や変容、複合や土着化などの諸相を幅広く、多面的に考究することが目指されている。具体的には、「東アジアにおける文化情報の発信と受容」という共通テーマのもとに、言語文化研究班、交流環境研究班、思想・儀礼研究班の三つのグループによる共同研究が遂行され、それぞれ既に各班の共同研究の成果として、内田慶市・沈国威編『十九世紀中国語の諸相—周縁資料（欧米・日本・琉球・朝鮮）からのアプローチ』（関西大学アジア文化交流研究叢刊・第一輯、雄松堂出版、2007）、陶徳民・藤田高夫編『近

因みに、関西大学は、他の多くの有名私学と同様、法律専門学校がその前身であったが、その後、総合大学として発展する過程で、西夏語や西域出土文書の研究、チベット学など、きわめて広域的な分野を開拓した東洋史学の泰斗、石濱純太郎（1888～1968）をはじめ、前述の大庭脩ら、錚々たる教授陣を擁して、東洋学・中国学の分野でも、独自の伝統を確立してきた。内藤文庫の存在など、内藤湖南とも所縁が深いことも、少なくとも斯界では、よく知られている。とりわけ近年では、こうした蓄積を背景に、東アジアを中心とした文化交流をグローバルな視点から多角的に研究しようとする、さまざまな試みが鋭意、展開され、国際シンポジウムの開催や出版活動なども盛んに行われている。共同研究機関としても、夙に東西学術研究所があり、次いで、関西大学アジア文化交流センター（CSAC）が発展的に組織された。長い射程で見るなら、上記のグローバルCOEはもとより、延いては、この「東アジア文化交渉学会」なども、まさにこうした素地の上に、齎された賜物と言うことが出来よう。

さて、同学会では、東アジア世界を多様な「文化的複合体」として捉え、各国・地域の文化を実体化することなく、「比較」や「交流」といった視点から、「従来の二国間関係あるいは学問分野別」の枠組みを超える、新たな学際的領域としての「文化交渉学」の創出が企図されている。すなわち、「東アジアでの文化生成・接触・衝突・変容・融合等の諸現象を動態的に把握し、トータルな文化交渉のあり方を人文学の多様な方法を総合して複眼的な見地から解明する」ことが目標とされ、「東アジアでの文化交渉」の実態を「二国間・二地域間という「一対一」の視点というより、できるだけ多国間・多地域間という「多対多」の視点を生かして分析する」ことが提唱されており、やはり理念としても、方法論や実際の研究内容においても、上述の二つのプロジェクトとの共通点には、大きなものがあるだろう。同時に、前述の「にんぷろ」なども、間接的なかたちではあれ、現代的な課題に対する一定の応答を企図しているが、同学会の姿勢として顕著なことは、こうした文化生成のプロセスを過去の歴史的な事象に限定することなく、現在もなお、継続中の動態的な運動体として捉え、将来に亘る変容や展望をも視座に据えている点に、見出すことが出来るかも知れない。

余記：

なお、拙論の成稿後、山内晋次氏の「『東アジア史』再考—日本古代史研究の立場から—」（『歴史評論』第733号、2011年）を一読する機会を得た。山内氏は、同論文において、まさに拙論でも紹介したような、「東アジア」世界の中で日本史をとらえようとする近年の動向が、動もすれば「日・中・韓（朝）」という「新たな三国史観」に過ぎないのではな

代日中関係人物史研究の新しい地平』（同・第二輯、同前、2008）、吾妻重二・二階堂善弘編『東アジアの儀礼と宗教』（同・第三輯、同前、2008）が刊行されている。他にも、同大学が開催した、国際シンポジウムの成果として、吾妻重二主編／黄俊傑副主編『国際シンポジウム 東アジア世界と儒教』（東方書店、2005）などがある。拙稿「宗教儀礼を軸に、東アジアの基層社会の実態、文化の交流と複合のダイナミズムに迫る意欲的な試み—吾妻重二・二階堂善弘編『東アジアの儀礼と宗教』（雄松堂出版）に寄せて」（『東方』337号、2009年3月号）、参照。

いか、との疑義を呈した上で、そうした枠組みを徒に墨守することなく、例えば、ウイグル・吐蕃などを含む「東部ユーラシア」の「内陸世界」や、日本列島から西アジアに跨がる「海域アジア」といった、より広い視野から、柔軟な地域設定にもとづいた研究が必要なことを提唱されている。

山内氏の言われる、必ずしも「自己完結的な歴史世界」を指定せず、「ゆるやかな歴史のつながり」の中で、随時、「仮説的地域を設定する」という問題提起は、拙論でも引証した、澤井啓一氏の議論（『〈記号〉としての儒学』。注9を参照）などとも関連して、大いに肯綮に中るところである。この点、特記して注意を喚起させて頂くとともに、同時に、かかる指摘が、当初の拙論の趣旨や範囲を大きく超えるため、現時点の拙論としては、結果的に、必ずしもこうした見解に対する応答とはなっていない点をお断りしておきたい。